

続「人臭い」話資料稿―異界は厳しい―

徳田和夫

承前

タイトルの「人臭い」とは、内外の民間説話・古典物語において、主人公（＝人間）が特殊なエリアすなわち異界（異世界、別世界）に立ち入ったときに、それを諷める鬼神の決り文句である。世界大の伝承であり、この場面をもつ物語を「人臭い」話と名づけた。なお、似た表現に「人間臭い」があるが、これは「人が誰でも持つような感情や欲望が感じられる」（『広辞苑』）さまを言い、論題の「人臭い」とは異なる。

この話群は祖先の自然認識を映しており、また、それを受け継いだ私たちの異界観をうかがうに足る。さらに、現代のアニメ映像などのファンタジー造形は、意図的あるいは知らずと、こうした古くの伝承に立って功を奏している。

二〇二〇年、新型コロナウイルス禍のさなか、アニメ映画『鬼滅の刃』無限列車編が大ヒットした。それは物語学や民俗学から、正体が見えない疫病の鬼や虫を祓う、厄除けの民俗儀礼の実修の歴史（記憶）とオーバラップしていると評し得る。何よりも伝承物語の昔話「妹は鬼（姉は鬼）」に取材したと判じられ、不思議の物語が生き続けて現代に顕在化した例として注目される。

お伽草子（室町物語）の一編『天稚彦草子』（大蛇婚姻系）は、天の川と牽牛星・織女星の由来を説いた物語である。「七夕の本地（七夕

の草子）」とも名づけられており、十五世紀中頃の絵巻がある（ベルリン国立アジア美術館蔵。残、下巻、〈図①〉）。物語は伝承性に富み、テーマ、モチーフは国際的であり、十七世紀前期（江戸時代初期）以降、これを享けた絵巻や奈良絵本が多く、なかでもサントリー美術館本（上下二巻、〈図④〉）は知られている（新潮日本古典集成『御伽草子集』）。

主人公は長者の三人娘の三女（三の君、乙姫）である。夫の天稚御子（天稚彦）が故郷の天上界に帰ったまま戻って来ないので、はるばる尋ねて行き、ようやく再会した。そこに、夫の親の鬼が顕れて「娑婆の人の香こそすれ。しはら臭や」（＝人間界の者の匂いがする。鼻につく）といった。三女は自分が歓迎されていないと知って、不安にかられた。案の定、鬼は御子の留守を見計らって、過酷な難題を課すのであった、∴。

『天稚彦草子』の伝本は大きく三系統に分かれる。

A 短文のA系統絵巻・絵本（前出）。なお、江戸初期ごろの六曲一双の屏風絵「天稚彦図屏風」（残、上一隻、江戸中期ごろ制作の専修大学図書館蔵絵巻（二軸）もある。右ベルリン本は現存の下巻に奥書を有し、「当今宸筆／絵土佐彈正藤原広周筆」（二行書）と記す。詞書は雄渾な筆遣いで、後花園天皇（応永二六年（1418）―文明二年（1470））の筆、絵は構図や人物表情が秀逸で土佐広周の画と判じられている。広周は、お伽草子の傑作『十二類絵巻』の絵を描いた土佐行広の次男で、将軍家御用絵師として活躍し、お伽草子の初期作



図① ベルリン国立アジア美術館蔵『天稚彦草紙絵巻』(部分)

品を代表する一つとなっている。なお、松平定信編『古画類聚』が上巻に描かれた器財、邸宅の一部を引き写して載せ、書名を「七夕草紙絵」(目録名「天若彦草紙絵」と記している)。

B 長文のB系統絵巻・絵本(安城市歴史博物館蔵絵巻(図②)・石川透氏蔵絵巻(図③)、静嘉堂文庫美術館絵本)。これは十五世紀以降に多くみられる本地物語の様態となっている。分量はA系統の優に三倍以上である。

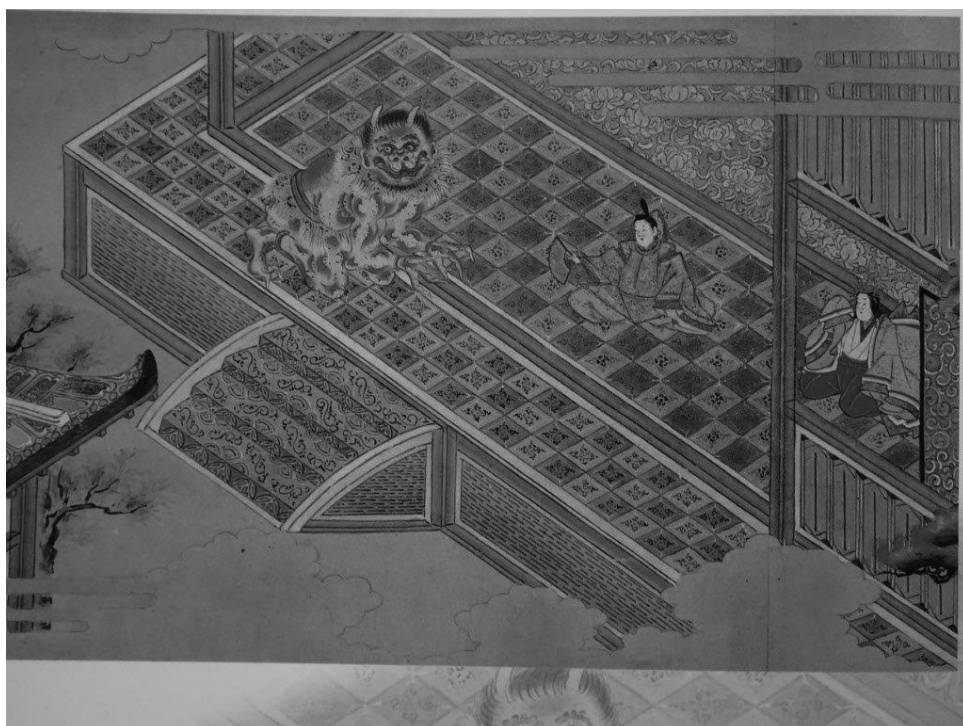
C 十五世紀後期頃の古今集注に記載された「乾陸魏長者譚」(略して「長者物語」)である。分量はA系統の二倍ほどである。内容・文体から、当時の物語草子を書写引用したと察せられ、お伽草子の一編と見なしてよい。

この三系統は当然、大本はひとつ泉に湧きだした物語であって、成書・流布の過程で三系に分派して、とりどりに物語草子化を歩んできた。その間に交渉し合うこともあったであろうが、三者の本文異同は極めて多く、かつ複合的である。そこで、分量の少ないA系統が先行するとしておくのが順当であろう。

さて措いて、右の「人臭い」話の場面はA、Bの両系にある。ただし、鬼神がそのようないうのは、A系は人間の異界への立ち入りを侵犯だと非難しているが、B系はそれを仏教の不浄観をもって許されぬこととする。なお、本稿での図版①④は、各絵巻のその場面に対応している。

A系統の物語

あらためて、サントリー美術館蔵絵巻によって梗概を記しておこう。むかし、長者の家に仕える女が川で洗濯をしていると、蛇が現れ、口から手紙を吐き出して、長者に届けよと命じて去っていった。長者



図② 安城市歴史博物館蔵『七夕之本地絵巻』(部分)



図③ 石川透氏蔵『七夕(題簽)絵巻』(部分)



図④ サントリー美術館蔵『天稚彦物語絵巻』(部分)

がその手紙を見ると、娘三人の中から一人を結婚相手に差し出せと書いてあった。長者は三人の娘にそのことを話すと、上の二人は拒絶する。しかし、親思いの末娘は承諾した。

長者は、蛇の指示にしたがって、大きな古池の前に家造った。一族、家来は姫をそこに置いて帰っていった。

亥の刻(午後十時頃)、激しい風雷雨電のもと、大蛇が出現する。姫はおののくが、大蛇に言われるまま、爪切り刀でその頭を切る。すると中から直衣姿の美しい貴公子が現れた。後に、名前を海龍王と明かす(「天稚御子」とも)。二人は小唐櫃の中に籠り、立派な家に住んで何不自由なく豊かに暮らした。

ある時、夫は天稚御子(天稚彦とも。以下、御子)と名のつて、天界におもむくことになった。「七日経ったら戻ってくる。戻らない時には西の京の女から一夜瓢(一夜瓢種をもらい、それを蒔き、蔓を伝って天上へ来るように)」と告げ、唐櫃を開けることを禁じて、出かけた。その留守中、姉二人が尋ねてきて、妹の暮らしぶりに嫉妬して、唐櫃を開けてしまった。御子は戻れなくなってしまふ。姫は一夜瓢を手に入れ、蔓に乗って(引き上げられ)天界へと向かった。(上巻) 姫は天界で宵の明星・帚星・昴・明けの明星に、御子の所在を尋ねて廻り、ようやく再会を果たした。しかし、御子の父は鬼の姿で現れた。御子は姫を隠すが、それを鬼は見つけて、「人臭い」となじる。鬼は二人の仲を認めず、様々な難題を課した。

そこで御子は、姫に自分の着物の袖を切り取って与え、「天稚御子の袖、天稚御子の袖」と唱えて振れと教える。この呪文によって姫は「千頭の牛を飼え」「千穀の米を一粒違わず運べ」という難題も解決し、大百足の小屋や蛇の城に閉じ込められても逃れた。

ついに、鬼は二人の仲を許し、月に一度の逢瀬を認める。しかし、

その言葉を聞き違えた姫が「年に一度ですか」と問い返すと、鬼はその通りだと言って、瓜を投げつける。瓜からは水があふれ出て、ついに天の川となり、二人は隔てられた。そして、彗星、織女となって、年に一度、七月七日にだけ逢えることになった。

エロスとプシケ、美女と野獣

この『天稚彦草子』は早くに、ギリシア神話の「エロスとプシケ」に極似すると指摘された⁽¹⁾。

アメリカの神話学者ジョーゼフ・キャンベル Joseph Campbell『千の顔をもつ英雄』⁽²⁾『The Hero With a Thousand Faces』は、世界の神話や民話における英雄物語の基本的な構成とその生成を論じ、その第二章「ニシエーション」(「試練の道」)にて、「困難な仕事」をモチーフにした最も有名で魅力的な話は、プシケが行方不明の恋人エロイを探す物語である。ここでは、主な登場人物の役割が普通とは逆になっている。花嫁を手に入れようとする恋人ではなく、恋人を手に入れようとする花嫁であり、娘に恋人が近づかないようにする非情な父親ではなく、息子のキューピッドを花嫁から隠そうとする嫉妬に燃えた母親ヴァイナスなのだ」と述べている(徳田補記。第十一章「エロス(クピド)」とプシケ)『ギリシア・ローマ神話』⁽³⁾、「試練と苦しみに耐え幸福を得る魂」『ギリシア・ローマの神話―人間に似た神様たち―』⁽⁴⁾。

これがさらに発展して生成したのが、いわゆる「美女と野獣」の(消えた夫の搜索型)であり、日本中世の絵巻はその古文獻となる。

「美女と野獣」は、民間説話のテーマ分類からすると異類婚姻譚の一種であり、「魔法(=魔術)」により、動物あるいは怪物に変えられた男性あるいは半人半神が、人間の娘と結婚し、その娘の愛と献身によって人間の姿に戻り幸福に暮すという話である(荒木博之「美女と

野獣」『日本昔話事典』)。話型名のとおり、主人公は美しい女性で、その苦難を経た幸福の獲得をものがたる。フランスの話型が知られており⁽⁵⁾、三人姉妹の末娘の物語となっており、鏡が「生命の指標モティーフ」となっている(指輪の場合もある)。また、変型^(バリエーション)もある。同構造の物語は世界に点在し、ドイツ「蛙の王子」はよく知られ、東北アジアには中国「蛙の息子」、韓国「青大将掣」「ひきがえる掣」、日本「たにし長者」(たにし息子)が伝わる。『天稚彦草子』は国際性をもつ物語ではあるが、「エロイとプシケ」との対応は、現段階では多くの類話における彼此^(かれこれ)としておくべきである。

前掲掲載「人臭い」話

前掲⁽⁶⁾にて取り上げた「人臭い」話は以下のとおりである。

〈日本の古典物語・演劇〉

お伽草子(室町物語)『花世の姫』(明暦ごろの刊本)

狂言『朝比奈』(十六世紀)

〈日本の昔話〉

*ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)英訳「団子を無くしたおばあさん」(一九〇二年刊)

*同「けけ蜘蛛」(同右)

「鬼が笑う」(新潟県南蒲原郡、他)

「鬼の子小綱」(松谷みよ子編『日本の昔ばなし』2。他)

「鬼と三人の子ども」(山梨県西八代郡、他。「天道さん金の鎖」(大分県、熊本県)

熊本県)

「米ぶき粟ぶき」(秋田県鹿角郡、他)

「龍宮の婿とり」(沖縄県宮古郡)

「姉のはからい(姉弟と山姥)」(岩手県、佐々木喜善編『聴耳草紙』。他)

「鬼の豆」(同右)

〈東北アジア〉

中国 古文獻「鬼酒鬼肉」(『新齊諧』)

中国 昔話「マトモとマヤカシ」(聴耳で過福を分けた義兄弟)」(河北省)

朝鮮半島 昔話「地下国大賊退治」

シベリア・ウデへ族 昔話「カンダ爺さん」

〈ヨーロッパ〉

ドイツ 昔話「金の毛が三ぼんはえてる鬼」(グリム童話KHM28)

(参考) ドミニカ共和国 昔話「悪魔の三本の毛」

イタリヤ 昔話「七羽の鳩」

フランス 昔話「悪魔の話」

スペイン 昔話「トカゲを信じた花嫁」

同「世界の三つの不思議」

補遺三点

類例は、今後とも追加されるであろう。本稿では新たにお伽草子(室町物語) および朝鮮の祭文から掲げる。(あらずしを記し、該当箇所を積文へ濁点、句読点を打ち、漢字を宛てた場合、初出のそれに元の仮名を読み仮名として残した)を引用。

*お伽草子『貴船の本地』

寛平法皇の寵臣に本三位中将さだひらがいた。宮中での扇比べのうちに、絵に描かれた美女をみて、恋の病となる。扇の持ち主の大臣殿は中将に、鞍馬山の奥にある鬼国に住む鬼娘の宮の美しさを語って聞かせる。中将は鞍馬寺で宮と出会い、二人は惹かれ合って鬼国におも

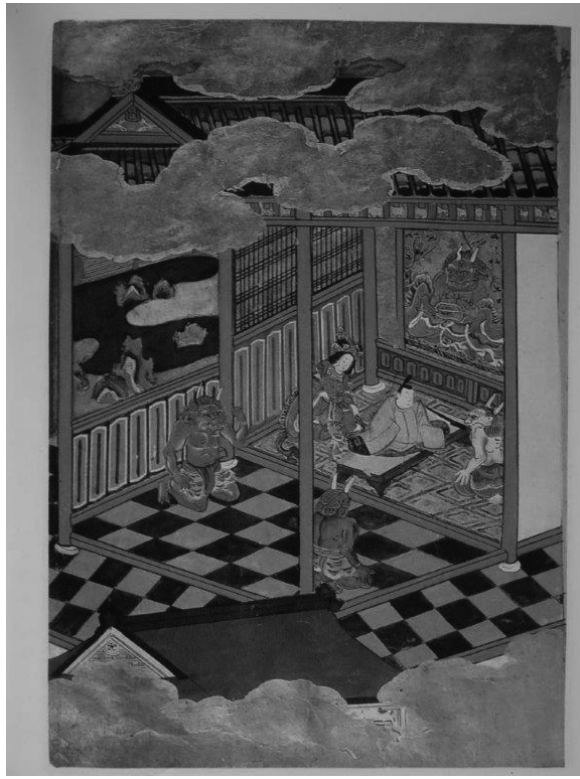
むく。鬼王の城で四方四季の風景を愛でていると、巨人の鬼神に來訪が察知され、大王に伝わってしまう。

宮は中将を逃がして、みずから大王の餌食となる。都に帰った中将は宮の死を知り、供養した。その頃、中将の父方の叔母に姫君が誕生した。しかし、左の手を開かないので、蓮台野に捨てられる。その子を中将が拾って育てた。十三年後に姫君が手を開くと、かつて宮と別れる際に交わした形見の品を握っていた。

姫君の転生を知った鬼は、日本へ來襲しようとする。それを鞍馬寺の毘沙門天が寺の別当に伝え、さらに天皇に奏聞され、鬼封じのために、節分や五節供行事などが始まった。

中将と姫君は夫婦となり、百二十年を生き、姫君は「木舟の大明神」(本地弁財天)に、中将は「まらうど神」(毘沙門天)と顕れた。恋の神である。(徳田編『お伽草子事典』)

折ふしに、宮の御けしき、色変はりて見え給ふ。仰せありけるは、
「妾が住みかへ、ただいま鬼神*來たり候ふぞ。しばらく傍へ忍び御覽せよ」とありしかば、中将、内に立ち忍びて見給へば、空より雷は落ちて、大地震して、おびただし。角のほとりに、その長、五丈ばかりなる鬼神來たりて申すやう、「大王より仰せなり。姫君急ぎ御出で候へとの、御使ひにて候ふ」と申しければ、宮、この由聞こし召されて、「妾はこのほど、鞍馬へ参りて、下向して候ふ。やがて参り候ふべき」と申されける。「受け給はり候ふ」とて、角のほとりより、立ち歸りて申しけるは、「いみじくも宮の御所内、もつての他に人臭く候ふ。日本の凡夫が候ふ。大王のこのほど御風氣にて、供御を御参り候はぬに、給はりて参らせ候ふべし。これは人のためにて候はず。宮の御孝行にてこそ渡らせ



図⑤ パリ国立図書館蔵『きふね』奈良絵本

給ふべき」と申しければ、「妾が住みかにかなる凡夫の候ふべきぞや。みずからこのほど精進にて鞍馬へ参りてありしかば、罪浅き凡夫の踏む血を踏みたれば、それにや穢れつらん。」さては、人ひとりもなし。急ぎ帰るべし」と仰せければ、「完然、人の香ししものを」とて眩き、眩き御前を立ちたり。（*別本「俱生神」）。

（慶応義塾図書館蔵。室町後期写本（7））

かやうに眺めをはしまして御覧するに、宮は、御気色にはかに悲しげにをはしける。「妾が住みかへ、ただいま怖ろしきもの来たり候ふ。かたはらへ忍ばせ給へ」と仰せければ、中将、げにもと思ひて、障子の内へ入り、世間、御覧するに、天より雷鳴り起つて、大地震動して、揺るぎ渡りて、草木風吹き、雨降り、御門ほとりより、長ならば五丈ばかりなる鬼神揺るぎ出でて申すやう、「宮は御入り候ふや。大王のきつと入らせ給へとの御使ひに、乙丸が参りて候ふ」とて、御前に畏まる。宮、此よし聞こし召して、「妾は鞍馬へ参りて候いつる。このほど下向して候ふと申せ。乙丸よ」と仰せければ、承りて帰りけるが、角のほとりより立ち返りて申しけるやうは、「いみじくも宮の内けしからず。人臭く候ふ。あはれ、あはれ、日本の凡夫がありけるか。給りて、大王に参らせて、生贄に参らせ候はん」と申す。宮、この由聞き給ひて、「妾が内にかなる凡夫があるべきぞ。妾、此ほど精進をして仏法に近づき、鞍馬へ参りて、罪浅き凡夫の血を踏みたれば、それにてこそあるらめ。罷り返れ。けしからずもの有様や」と仰せありければ、「よに、人臭く候ふ」とて眩きて、御前を立ちけり。（慶応義塾図書館蔵、承応明暦ころ丹緑本（8））

＊お伽草子『諏訪の本地』（兼家系）

・甲賀の権守兼さだに三人の子がいた。嫡男を太郎兼まさ、次男を二郎兼みつ、三男を三郎兼家といった。権守は往生のみぎり、三人の兄弟に土地を平等に分け与えた。しかし、宝物の「菊水の種」と「しくもつ杖の杖」（江戸初期写本。同絵入り写本「ゆふまん杖の杖」は兼家に譲った）

あるとき太郎は、二郎、三郎に、山と海といずれに怖ろしい魔王がいるだろうかと尋ねた。二郎は海だろうと、三郎は山だと応えた。三人は三郎の意見を入れて、諸国のあの山この山を尋ねて廻り、三年が経ったが、魔王には出会えなかった。兄二人は、好い機会だと三郎を懲らしめようとするが、三郎のもとに八十ほどの翁が現れ、若狭国の高懸山に行くと教えた。三人は勇んで出かけた。

亥の刻ほどになって、群雲がたなびいて、雷電がおびただしく震動し、地震がたびたび起き、天地も一つになれとばかり揺るいだ。子の刻ほどに、唐傘ほどの黒雲が立ったと思うと、大音が聞こえてきた。

…雲の上に大音あげて言ひけるは、「あら、人臭や。憂き（「よき」カ）人食して、心地を直さんずる嬉しさよ」とて、槽の上に舞ひ下がると思えければ、太郎殿、二郎殿、たぶさを掻い攪んで、空にまい昇る。

その時、三郎殿、七人張りに十七束の鎧を取りて、つがいて、よく引きて放ち給ふに、手元にこたへて、ものをぞ射落とし給ふ。さて、逃ぐるを待ち給ふに、太郎殿、二郎殿を始めとして、三十人の人々、皆むなしくぞなり給ふ。三郎殿、大きに歎き給ひて、その時、父より譲り給ひし菊水の花の種を水にそそぎて、滴を口に入れ、しくもつ杖の杖をもつて三度まで給へば、皆人々蘇りし

給ひける。その後、乾飯を洗ひて勧め給ひけり。皆もとの心になり給ふ。

さて、天も晴れば、射落としたる物を見給へば、腕の回り四尺八寸なりける手をぞ射落としける。されば人々、皆身の毛をもよだちてぞ見給ふ。（略）（江戸初期写本（9））

…頃は八月中旬なり。月も隈なくして、三郎殿の下知に従ひて、人々、片手矢はげて、あい待つ所に、鹿三十二、三、打ち連れて出できたる。三十人の人々、巻つづつ止めらる。

亥の時に及びて、村雲一流れ引き覆ひ、雷電おびただしく鳴り、激しくて、天地も打ち返すかと思ひたり。人々、心猛くとも魂を消し、弓矢を捨て伏し給ふ。や久しくありて、角の三つ生ひたるに、霰一村降りて、さつと晴れ、月はもとのごとくに輝きたり。少し、心地を取り直し、片手矢はげて待ち給ふ。

南の山のなかばより、雲の上に大音声上げて、「あら、人臭や。良き人食し、心地を直さん嬉しさよ」とて、槽の上に舞い下ると見ければ、（略）（江戸初期絵入り写本（10））

韓国の巫歌（本解）『鉢里公主』（捨姫祭文）（1）

＊『ソウル地域のバリ公主神話』（括弧内は会話。地の文は適宜まとめている）

…朝鮮の大王には六人の姫君がいた。しかし、跡継ぎの男君がおらず、后妃が懐妊すると、男子の誕生を願った。しかし、健やかに誕生したのは女子であった。王は落胆の余り、その末娘をバリ公主（『物乞いの皇女』と名づけて捨てよと命じた。バリ公主は籠に入れられ河に流された。それを、釈迦世尊がみて、貧しい功德翁、功德婆に拾い上

げて育てよと託した。

バリ公主が十五歳になったとき、王、后は同日同時に重病にかかった。巫覡ふけきに占わせると、バリ公主を捜しだし、東海龍王から龍眼珠を、西海龍王から龍珠を、三神山（蓬萊、方丈、瀛州えいしゅう）の不死薬を、蓬萊山のムザンスンの薬水を求めよ、バリ公主を捜し出せとの占形が出た。王はそこに行く者を募ったが、臣下は、「東海の龍王も龍宮であり、西海の龍王も天宮であり、蓬萊山のムザンスンの薬水がある所も水龍宮であるが故、生身の人間は行けません。死後に魂魄が行く所であれば、それを挙行する臣下はございません」という。王は小臣に命じてバリ公主の搜索を命じた。臣下はやむを得ず出立した。

…光化門の闕門を出てきたものの、行き先がわからなくて途方に暮れてしまった。黒い鷲が現れ、後を付いて来るように合図をし、木々が導いてくれたので、太陽山の西の村をとうとう見つけて入って行ったら、月直使者・日直使者（＝死者の魂をあの世へ導いていく女神と男神）が尋問して曰く、「人間の匂いがする、そなたは鬼神か人間なのか、ここは陸の動物も、空を飛ぶ鳥も入って来られない天宮なのに、そなたはどうして入って来たのか。」（臣下曰く）「私は両殿下の御奉命で、バリ公主の捨て処を捜して、生死を決して参りました。道を導いて下さい」と、鉄門を叩きながら叫ぶと、ピリ功德の爺さんと婆さんが出て来て、「鬼神か、人間か、陸の動物も空を飛ぶ鳥も入って来られない天宮に侵入するとは」と訊ねた。…

こうして、バリ公主は見出された。親孝行のバリ公主は父母が病氣と聞いて憂え、遙かな旅路を決意した。男装し、「西天西域国」を目指した。地獄の十王、浄土の異界を廻って、薬を入手して戻り、父母の病も癒えたことであつた。

* 『安東地域のバリ公主神話』（キョンサンプクト慶尚北道北部）（括弧内は会話。地の文は適宜まとめている）

…チヨンブルサンの大將軍には八人の姫宮がいた。后のコムタルヘビオン様が新たに懐妊し、大將軍は男の子をと願った。しかし、女子が生まれたので、畑に捨てさせた。すると、空から一つがいの鶴がひらりと舞い降りて来て、一羽は片方の羽を敷いて、もう片方の羽を掛けて、赤ちゃんを抱いて、もう一羽は、赤ちゃんの食べ物くわえて来て、いろいろ面倒を見て育てた。

大將軍と后は、娘八人を成人させ、よその家にお嫁にいかせてから、大將軍は黄痘、黒痘の病にかかり、后は一食に牛一頭を食べても満腹にならない餓鬼の病となった。百薬を尽くしても、病氣は悪化した。占師の一人が、西天西域国の薬水が効くという。后は八人の娘に薬を採りに行ってくれるかと尋ねたが、全員が断った。后はピリデギ（＝捨てた子）を思い出して呼びだした。満月のような美人となっているピリデギは、母の願いを受けた。

ピリデギは顔に墨を塗り、髪の毛を束ねて、荒事用の袴をはいて、瓢箪の瓶を脇に抱えて、とぼとぼ歩いて行つた。

道中、人びとに西天西域国への道を探ねた。奥さんの洗濯、工事人の架橋、塔の建築、洗濯女の手拭い洗濯の仕事を代わってやり、次々と尋ねて行く。高僧に尋ねると、弥勒様に尋ねよという（参考。肥えた馬、痩せた馬、鼓打ちお婆さん、水深の深い水、膝や手で白をつくお婆さん、洗濯女に道を探ねると、同じことをいう。また、それぞれは罪状を知りたい、帰りに教えてくれと頼む。『感興地域のバリ公主神話』。cf.ドイツ昔話「金の毛が三本はえる鬼」）。

「弥勒様、弥勒様、西天西域国へは、どうやって行けばいいですか。」ピリデギの美貌に惚れた弥勒様がピリデギに曰く、「私と結婚して、

七人の息子を生んでくれたら、教えてやる」。一年、二年が経って、息子七人を全員生んであげた。「弥勒様、そろそろ私に西天西域国へ行く道順を教えて下さい」。「あの向こう側が西天西域国であるが、小さい河、大きい河、万頃滄波（＝大海原）を無事渡ることができるかい」。

ピリデキが困っていると、天からムサン（注「天女の名前か」）天女が三人降りて来て、沐浴している間に、ピリデキは天女のパジ（＝下半身に履く民族服）を盗んで、藪陰に隠れていると、「ほらほら、どこからか人間の匂いがする。人間の汗の匂いもする。ここは人間が勝手に出入りできるような所ではないのに、獸同然の人間が出入りしていることは許しがたい」。二人の天女は衣を体にまとって天に昇ったが、一人はあっちこっちパジを探していた。その時、ピリデキがパジを渡しながら、「私もあなたと同じ女であります」。ムサン仙女がピリデキを見ると、ピリデキもムサン仙女と同じようであった。

二人はハンソン（注「不明」）峯に登り、血を甦らす水と、肌肉を甦らす水と、息を甦らす水を、三つの瓶に分けて、衣服の帯などにつけて、血を甦らす花と、肌肉を甦らす花と、息を甦らす花を三本摘んで、ヤカムジの木の枝を三つに折って胸に抱え、別れを告げた。ピリデキが万頃蒼波を前にして途方に暮れて足を投げ出して、大きな声で泣いていると、龍宮から親孝行のピリデキのために亀（＝長生きを象徴する十長生の一つ）を送ってくれ、弥勒のところへたどり着いた。

弥勒は海を渡る様々な船をみせた。それは、人間が現世で罪を犯して、十王の所に乗せられて行くのであった。また、功德を積んで、天に昇り、牽牛織女の星座に送る船もあった。この世では、チョンブルサンの大將軍とコムタルヘビョン様が同日同時に亡くなった。ピリデキが二人に薬水をかけると、蘇った。娘八人は逃げ出してしまった。両親は、ピリデキの息子七人を膝に乗せて、喜んだ。

ピリデキは「何も欲しくはありません。私の希望はただお寺に行くと、お坊さんになるか、齋（＝冥福を祈るための法事）の時、供養されたい。人間が死ぬとそれぞれオグ祭（＝死霊祭のクツ）をします。私はオグ神（＝オグ祭のとき祀られる神）になってオグとして祭られる魂（＝オグを主宰する神）となり、私の前に跪いて来るオグの魂（＝罪を犯して亡くなった者の魂）たちを十王世界へと導く仏声聞にさせて下さい。南無や南無阿弥陀仏」。

〈補説〉

前稿および本稿にて掲げた「人臭い」話は、いずれも各民族の伝承説話あるいは仏神・神霊祭祀にかかわる物語である。それだけに精神文化の一斑の異界観を端的に映している。とくに本稿の事例は、人間は生きながら、生身のままでは異界に入ることはいかならないと主張し、その禁を犯すと、「人臭い」と非難されるとしている。すなわち、異界訪問は死後、霊魂として為し得ることとするのである。これは、来世を説く宗教一般の教理そのものである。この点で、古今東西の「人臭い」話は霊魂観や転生思想にかかわる。

そこにあつて、人間が異界に立ち入る折に、異界側がその形姿を話題とする物語があり、看過できない。十四世紀に成立した仏教唱導の書『神道集』の「諏訪縁起」である（巻十第五十）。主人公を甲賀三郎諏方とし、妻は春日姫という。夫妻は諏訪の上社、下社の神となったものがたる。この縁起譚は、室町時代後期には単独の縁起書に編み直され流布した。合わせて『諏訪の本地』諏方系という。なお、先に引用した『諏訪の本地』は三郎の名を兼家とし、兼家系と呼ばれるグループであり、三郎の地底訪問譚はない。

甲賀三郎諏方は兄二人の姦計によって、地底世界をさまようことに

なる。『神道集』が語るところを概略すると、そこは地上と同じような国々が広がり続いている。それぞれは日本と同じ行事や労作の景となつてゐる。最後に到つた維縵国には四方四季の庭がある。三郎は、十五年ほどで七十有余の国を通過し、さらに維縵国から日本まで千日の旅を経て地上に出たが、その姿は蛇身であつた。そこで、維縵国の衣装を脱ぎ捨てると、元の人間に戻つた。

三郎の異界の旅は、いうならば人身から蛇体となる階梯である。地底国はいずれも、三郎が突然現われ、人間だと知つて驚く。しかし、受け入れる。物語の作者・語り手は、神となる者の苦難と試練の過程を説き語るのであつた。『諏訪の本地』の一本（江戸時代後期写）⁽¹²⁾の「早苗取る国」では、三郎を見てこういつた。

この国へは、日本の人は様を変へてこそ来たるに、ただ様を変へず来たる不思議さよ。ただ人ならず、通すべし。

また維縵国では、狩りをする八十余りの翁に「いづくよりの人ぞ。おぼつかな」と問われ、「われはこれ日本の者なり」と応じると、翁はいう。

さては、思ひのまします（恋の思いに捉われていらつしやる）人なり。これより彼方には国もはんべらず。もし国ありとも、様を変へずしては叶ふまじ。ちと逗留して遊び給へ。

かくて、三郎は「様を変へ」るべく滞在する。

それでは『神道集』はいかに叙しているだろうか。三郎は春日姫の鏡面影を飽満食という双紙に包み持ち、日光剣を佩いて地底国をめぐる行く。国を新たにするたびに、問われて名のり、あるいは自ら

告げる。以下は各国の反応である。神道大系本の本文を読み下してみた。⁽¹³⁾

- ・好賓国（東洋文庫本「好賞国」。「的を射る人」が「甲賀殿をつくづく」と打ちまぼり給ひて、いづくよりの人ぞと問ひければ、…」。
 - ・田植えをする「草微国」。黒い唐笠を着けた田奉行や早乙女が「あな、怖ろしや。何として、此の国までは来たり給へるぞ」。
 - ・稲を刈る「草底国」。「此の国へはおぼろげにて、日本の體を替へずして来る処にても候はず」。
 - ・田の草を取る「草留国」。田の奉行が「琵琶湖が千年を経て桑原となり、千年を経て海となるのを三度までは見たれども、日本の人の未だ体を替へずして、生きながら此の国へ来ることをば目にも見ず、耳にも聞かず、まして此のごとく現れ見参することは昔物語にも承り伝へざるなり」。
 - ・春の草花を楽しむ「蛇飽国」。「大きに騒ぎ合ひ給ふ」。
 - ・「維縵国」。「御辺をば日本人と見奉るが、体をも替へずして、是まで通り給ひけるこそ不思議なれ」。
- ここには、『天稚彦草紙』にみる、天上界の鬼神が地上の人間を捉えて「人臭い」と発する設定はない。ただし、その到来に驚き、奇異に受けとめている。そこに恐れ、咎め、忌む感情や意思がはたらいっているかは不分明だが、傍線をほどこしたその言いぶりは、三郎が地上での姿のまま来たるのに驚いている。裏を返せば、三郎は姿を変えていれば、何なく忍びこむことはできた。
- ここで「姿を替へる」とは変相をいう。では、具体的にはどのような姿態に変わればよいのか。当面、考え得られるのは二点である。一つは、地底を黄泉の国、根の国のようなところとし、死後に霊となることを指すのであろう。靈魂であれば、通過も入国も咎められること

はない。前稿の「人臭い」話群には、主人公が明らかに死後の世界に踏み込んだ、中国の「鬼酒鬼肉」がある。これも参考にすると、三郎はいったん死に、難儀の試練を経て再生したといえよう。「地獄破り」説話の主人公は地上に生還する。狂言の『朝比奈』は剛毅な武士が閻魔をやりこめて帰ってくる。

二つは、地底国廻りはその世界に融和、同化する過程であるとの観点である。これも、最終的によみがえる。復活再生である。その姿態は、地底ゆえ、イメージし提示するのは、地中、水中に棲む異形のモノすなわち脱皮する蛇である。三郎は維縵国に長く滞在して蛇身となり、地底を抜け出たのであった。

諏訪神は龍蛇信仰から形成されたとされる。「へび或いは大蛇を神として祀る例では、…信州諏訪大社におけるへび神は（略）古い祭事の記録によれば、神祕の御正体としてソソウ神・長御神の名が見られる。これは蛇体である。（略）御室と称する齋場で、年の終り数日におこなわれた大夜明祭と称する祭儀では、ソソウ神・長御神及びカヤの御正体（蛇形）を御室に籠める行事（籠蛇或いは籠蛇）があった。カヤの御正体を籠めたのちには、いびきをかき給う奇瑞が必ず起こったとある。御室にこめた神体は、三月丑の日に取り出される。つまり伏羲・啓蟄に相当するのがこの祭事であった。諏訪明神とちなみ深い甲賀三郎伝説では、主人公が地底の国を遍歴することになっているが、その発想は仏教から発したのではなく、恐らく籠蛇の祭儀の印象から出たものであったろう（略）⁽¹⁴⁾。

三郎は地上に出てから、自分が蛇となっていたことに気づく。維縵国の衣裳を脱いで、蛇からヒトに返った。諏訪の七不思議のひとつ御神渡りは、諏訪湖が全面結氷したある晩に、上社の大蛇神（三郎即ち方男神）が下社の女神春日姫のところへ身をよじって走った跡と言

い伝えられ⁽¹⁵⁾、浅間山真楽寺（長野県御代田町）は、蛇体の甲賀三郎が帰還した場所が境内の大沼だと伝えている。

ヒトの異界への侵入を、その主が「人臭い」と詰るのは、その匂いを発することを禁じ、そこに暮すのを阻止している。言い換えると、「諏訪縁起」や『諏訪の本地』の地底巡歴譚は、三郎が人間のままでいることを許さなかった。つまりは、生身の匂いは忌避したのである。三郎は蛇体を経たことで神となったのである。したがって、この物語は「人臭い」話に準じるものと捉えられるのではなからうか。

なお、人間が異界に滞在して蛇になった、地上に戻って蛇体を脱したものがたる説話は他にもある。室町前期の絵巻『地藏堂草紙』である。越後国、菅野の地藏堂で、法華経の書写をする僧がいた。そこに美女が現れる。女は堂塔を修理し、自分は龍王の姫だと明かし、僧を龍宮に招く。僧は女と同衾し、その足をみると鱗があった。あわてて地上に戻り、荒れ果てた地藏堂にたどり着いた。しかし、堂内は大蛇がいると騒ぎ、悲鳴が聞こえた。僧は自分が大蛇になったと悟るのである。

こはいかなる事やらん、ありし錦のやうなる物を着せられしと思ひしより、はや蛇に成りにけりと、口惜しく覚えて、彼の地藏に向かひ奉りて、心中に発露涕泣して、罪障を悔ひ悲しみて、如法経を如説に書き奉る願を起こして慙愧、懺悔しけるほどに、その夜更くるほどに、この大蛇の背中、はたと割れて、その背より、此の僧はひ出で、抜け殻をみるに、まことに怖ろしき事、たとへて言はん方なし⁽¹⁶⁾。

僧を知る者は誰もいない。さらに堂衆はそうした僧がいたと聞いてい

るが、それから二百年は経っているといった。「その聖は海龍王の娘に親しくなりて、海に入り待るとこそ、申し伝へ侍れ」。

これは僧侶の破戒・失敗譚の面が顕著になっているが、物語の要諦は人間が異界を訪れて蛇となったことにある。三郎の地底巡り譚と同様に、蛇身となったのは異界侵入ゆえであるとしており、それは異界に立ち入って「人臭い」といわれることと同等とみなせよう。

注

1 土居光知「エロースとアメワカミコ」〔心〕22・8、一九六九年。転載、「神話・伝説の研究」一九七三年。著書集3、一九七七年、岩波書店。

2 ジョーゼフ・キャンベル Joseph Campbell『千の顔をもつ英雄』*The Hero with a Thousand Faces* (上下。倉田真木・斎藤静代・関根光宏訳、二〇一五年、ハヤカワノンフィクション文庫)。

3 ブルフィンチ Thomas Bulfinch 作、野上弥栄子訳『ギリシア・ローマ神話 *The Age of Fable*』(一九七八年、岩波文庫)。

4 吉田敦彦『ギリシア・ローマ神話—人間に似た神様たち—』(一九九六年、ちくま文庫)。

5 樋口敦・樋口仁枝編訳「ちいさなカラス」〔フランス民話の世界〕一九八九年、白水社。新倉朗子編訳「美女と野獣—庭師の娘」〔フランス民話集〕一九九三年、岩波文庫。堀田郷弘編「美女と蛇」〔フランス民話バスク奇聞集〕一九八八年、教養文庫、社会思想社。

なお、ヴィルヌーブ夫人著『美女と野獣 *La Belle et la Bête*』(一七四〇年刊)、これを四分の一ほどに縮めたポーモン夫人 Jeanne-Marie Leprince de Beaumont 著の同名童話(一七五六年刊。鈴木豊訳「美女と野獣」一九七一年初版・二〇一四年27版。ウォルト・デイズニーの同名アニメ映画の原作)は再話小説であり、民間伝承のものではない。また、二〇一四年に上映され

た実写版は新たな解釈(森の神・精霊の登場)のもとに製作された。島尾新・宇野瑞木・亀田和子編『倭漢のコードと自然表象—十六、七世紀の日本を中心に—』(二〇二〇年三月、勉誠出版)。

6 なお、「昔話の(人臭い)話 日本編」に、「天道さん金の鎖」を独立させて加えたい。拙稿「山姥雙紙」は何処(いずこ)、「怪と幽」7、二〇二二年四月刊予定、KADOKAWA)を参照されたい。また「(人臭い)話 中国・韓国編」に取りあげた「鬼酒鬼肉」〔新齋語〕は袁枚編の乾隆五三年(一七八八)刊「子不語」にも載る(中国古典文学大系42前野直彬訳「閩微草堂筆記 子不語述異記 秋燈叢話 諧鐸 耳食錄」一九七一年、平凡社。第三三「紫河車の洗濯」)。さらに拙論「天翔る物語—室町のファンタジー—」〔説話・伝承学〕28、二〇二〇年三月)も参照されたい。

この機会を利用して、誤植を訂正しておく。半角タテ算用数字はページ数を示す。

200 下段5行目「共したり」↓「灯したり」。

210 上段18行目「一速千里」↓「一足千里」。

210 下段9行目「粟ぶに」↓「粟ぶきに」。

212 上段11行目「ありあり」↓「あり」。

215 上段7行目「平気な顔でそんな」↓「平気な顔で『そんな』」。

218 上段6行目「適持ちになって国は」↓「金持ちになって国へ」。

219 下段6行目「澄めない」↓「住めない」。

7 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』4 (一九七六年、角川書店)

8 前注7。なお、図⑤として掲出したパリ国立図書館蔵本は、古典文庫『奈良絵本集 パリ本』(一九九五年)に掲載される。

9 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』8 (一九八〇年、角川書店)

10 前注9。

11 金香淑『朝鮮の口伝神話『パリ公主神話』集』(一九九八年、和泉書院)。

- 徳田和夫「中世神話論の可能性」(『お伽草子研究』一九八〇年、三弥井書店)。
転載(日本文学研究大成、藤本徳明編『中世説話Ⅰ』一九九二年、国書刊行会)。
- 12 松本隆信編『御伽草子集』(新潮日本古典集成、一九八〇年、新潮社)。
- 13 神道大系所収本(旧赤木文庫本)。
- 14 鈴木棠三著『日本俗信辞典・動植物編』(「蛇(1)家の守り神、神秘の蛇」、一九八二年、角川書店。文庫版『同動物編』、二〇二〇年、角川ソフィア文庫)。
- 15 徳田和夫「七不思議の中世伝承―巷説、そして諏訪と天王寺―」(福田晃・徳田和夫・二本松康宏編『諏訪信仰の中世―神話・伝承・歴史―』(二〇一五年、三弥井書店)。なお、二本松康宏「諏訪縁起の変容―諏訪大王から甲賀三郎へ―」、永松敦「中世諏訪の狩猟神事―稲と鹿・葦と薄―」(同書所収)は、嘉禎三年(一二三三)奥書、歴仁元年(一二三八)写『諏訪上社物忌令』の「七石之事」(「七不思議」)に触れる。
- 16 松本隆信編『室町時代物語大成』補遺二(一九八五年、角川書店)所収。引用に当たり、原文に濁音、送り仮名を補った。

(本学名誉教授)